
大人のための異文童話集10 アリとキリギリス

天野久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人のための異文童話集10 アリとギリギリス

【Nコード】

N1515M

【作者名】

天野久遠

【あらすじ】

それはいつの頃でしょうか…他愛無くお話しをしては、楽しそうに音楽を奏でて、アリの姿をそっと見ているだけのギリギリスと、そんなギリギリスの残した音楽を心に奏でながら、自分の一生懸命な姿を見せたくて働いていたアリのお話です。

またいつものように、キリギリスがアリに向かってお話をしています。

「キミはいつでもいろいろなことをして、朝から晩まで一生懸命に働いているんだね。」

「そんなに一生懸命に働いて楽しいのかい？」

「それにしても、キミが楽しいと思うことって働くことなのかな？」

「ボクは毎日楽しくて仕方がないんだよ。」

「ボクはこうしてポカポカとお日さまを浴びながら、好きな時に寝て好きな時に起きる。」

「そうして目覚めると音楽を奏でているだけでいい。」

「まあ、それぞれに好きなことが違うのだからね。」

「ボクは毎日好きな時に音楽を奏でて、キミは毎日朝から晩まで一生懸命働いて。」

「でも、それでいいんだろうね。」

「やってることが楽しいと思うなら、きっとそれでいいんだよ。」

いつでもキリギリスはアリの姿を見つけると、楽器を弾きながらそう言うのです。

初めのうちは“そんなくだらないことをして”と、アリはキリギリスのコトバには決して耳を貸すこともなく、黙々と働いていました。

そしてある日のこと…

アリは働き過ぎて病気になってしまいました。

そんなことになっているとは露とも知らないギリギリスは、毎日休みなく働いていたアリが、今日は一度も姿を見せないの心配していました。

最近ではアリも、働きながらギリギリスの話を聞いてくれていたから、いつしかギリギリスは音楽を奏でるよりも、一生懸命に働くアリの姿を見ながらお話することの方が嬉しくて楽しくて、何ともいえない気持ちでした。

そしてアリが病気になったことを知ったギリギリスは、急いでアリのところへお見舞いにいきました。

アリのお家の人はみんな仕事に出掛けていて誰もいません。アリは何も出来なくて寂しくしてました。

そんな時にギリギリスのお見舞いです。

アリはとっても喜んで、いつも以上にギリギリスのお話を聞きました。

ギリギリスも、思ったよりアリが元気そうなので安心しました。

ギリギリスは毎日アリのお見舞いにいきました。

それからというもの、アリはギリギリスが来ることを待ち望むようになっていました。

ギリギリスはお見舞いに来ると、音楽を奏でながら、たわいのない

お話をして過ごします。

アリはその音楽とお話して心が暖かくなり楽しくなります。

そんなことが数日続き、アリの病気はもうすっかりよくなりました。キリギリスもまた、一生懸命に働くアリの姿を見れると喜びました。病気を明けて働きはじめたアリは、以前とは少し違って、キリギリスの音楽やお話しを楽しみに、働くようになっていました。

こうして日々が過ぎるうちに、春から夏、夏から秋へと季節は変わり、寒い冬がもう近くまでやって来ていました。そしていつしかアリは、キリギリスの価値観を認めてるようになっていました。

とうとう寒い冬がやって来ました。

アリはそれまでに一生懸命に蓄えた食物で不自由はありません。

しかし、それまで毎日のように好きなアリの姿を見ながら、音楽を奏ではお話をして暮らしていたキリギリスは、冬への貯えなど何もしていなく、寒い毎日をひもじく暮らしています。

そんな姿を見兼ねたアリは、家族に相談して、キリギリスを家に置いてあげたいと話します。

しかしそれを聞いたアリの家族は

「毎日好きなことばかりして遊んでいたのだから、自業自得だ。」

と言って、まったく取り合ってはくれませんでした。

仕方なくアリは、自分の集めた食物の中から少しだけ、こっそりと

ギリギリスに届けては、お話や音楽を聞きました。
そんなことを続けているうちに、とうとう本格的な寒い冬がやってきたのです。

アリは振り積もった雪で外へも出られなくなりました。

どうして誰も、ギリギリスのことを分かってあげないのだろう？
なぜかアリの心は痛んでいます。

アリは自分が病気の時、ギリギリスが奏でてくれた音楽やお話が、何も出来なく寂しかった自分の心を、優しく暖めてくれたことを知っています。

その時からアリは、世の中には働いて食料を貯えること以外にも、それぞれに違った価値観で、違った役立ち方があると知りました。
それでもやはり、食べていかないと生きてはいけません。

今頃…ギリギリスは、どうしているのだろう。

アリは外を眺めては毎日そう考えます。

あれは、本格的な寒い冬になる前のある日のことでした。
アリがこれからのことをギリギリスに尋ねると、ギリギリスは笑って答えました。

「ボクの音楽は好きだからやってるだけだよ。」

「だからボクはボクの価値観に従い、キミはキミの価値観に従えばいい。」

「価値観なんてそれぞれ違っていいのだから、選んだ違いで生じる結果は気にしてはいないよ。」

その時アリには、ギリギリスの言っていることが理解出来ませんでしたし

た。

ただ、そうギリギリスが答えるのを聞いて、アリは何故だか胸の奥が熱くなって目の前がぼやけていました。

きつとギリギリスさんは食べることよりも最後まで、音楽を奏でることを選ぶのだろう。

もうすぐ側にはいなくなる気がする。

アリがそう思った時、心に寂しさを、瞳に涙を呼んでいたのです。外に出られないくらい、たくさん雪が降り積もってから、暫くは、遠くの方でギリギリスの奏でる音楽が聞こえていました。

ギリギリスは雪の降り積もる寒い冬でも、アリに聞こえるようにと、音楽を奏でていたのです。

アリはそんな音楽を耳にしては、何度も家族に頼みました。何度も自分の食料だけでも持って、家を出ようと試みました。

そのうちに、雪深い外からは音楽も聞こえなくなっていました。

そして寒い冬は去りました。

しかし、もうどこにもギリギリスの姿はありませんでした。

それでもアリは、毎日ギリギリスを探し続けました。

なぜなら…

耳には聞こえなくても、アリの心の中には、いつまでもギリギリスが奏でてくれた、あの音楽が聞こえていたからです。

「ボクはキミが一生懸命働く姿が大好きで、それだけを見て暮らしたいんだ。」

そしてアリは、いまでも毎日黙々と働きながら、ギリギリスが言ってくれたこのコトバを思い出すのでした。

それはいつの頃でしょうか…

他愛無くお話しをしては、楽しそうに音楽を奏でて、アリの姿をそっと見ているだけのギリギリスがいました。

そんなギリギリスの残した音楽を心に奏でながら、自分の一生懸命な姿を見せたくて働いていたアリがいました。

（後書き）

BGMには鬼束ちひろを“私とワルツを”を聴いて欲しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1515m/>

大人のための異文童話集10 アリとキリギリス

2010年10月20日18時33分発行